

OPUS / 作品

日本初演
Japan Premiere

Opus

小劇場

●前売開始：2013年6月23日(日)

●料金 A：5,250円 B：3,150円

作： マイケル・ホリンガー

翻訳：平川大作

演出：小川絵梨子

出演：段田安則 相島一之 加藤虎ノ介 伊勢佳世 近藤芳正

企画意図

2013/2014シーズンの幕開けを飾るのは、新進の演出家として、今演劇界の熱い視線を集める女性演出家・小川絵梨子による『OPUS / 作品』(オーパス)。「30代の演出家の現在の視点のあり方を、お客様とともに見つけたい」と宮田慶子芸術監督が企画したシリーズ第一弾として上演します。

06年にアメリカで初演された本作は、弦楽カルテットの4人の男性を中心に、人間の欲望や猜疑心、嫉妬や裏切りを、コミカルに描いた秀作です。

新国立劇場では『コペンハーゲン』の翻訳で高い評価を得た平川大作による新翻訳を、小川絵梨子の鋭い視線で演出、カルテットのリーダー、エリオット役として『温室』での名演技も記憶に新しい段田安則が出演するなど、注目度の高い作品です。

東京公演後には、水戸芸術館での公演を予定しています。

作品

弦楽四重奏団ラザラ・カルテットは、差し迫るホワイトハウスでの演奏会に向けて、急遽ヴィオラ奏者のオーディションを行っていた。そこで選ばれたのは、グレースという若き女性。もともとのメンバーだったドリアンは、その起伏の激しい性格から解雇されており、数週間前から忽然と姿を消していた。

カルテットのメンバー達は、ホワイトハウスでの演奏会に難曲であるベートーヴェンOpus 131を選曲。だがグレースには不慣れな曲だったため、カルテットは限られた時間内で出来る限りのリハーサルを行わなければならない。

Opus 131のリハーサルに励むグレースとエリオット、アラン、カールの4人。演奏ミスが多いエリオット。他の3人がそれを指摘するも、エリオットは決して自分のミスを認めようとはしない。ホワイトハウスでの演奏まで時間が無い。4人のリハーサルは緊迫していく。

なんとか無事に演奏会が終わり、楽屋に戻った4人の前に突如としてドリアンが現れる。ドリアンはエリオットを解雇し、自分が第一ヴァイオリンとしてカルテットに戻り、アランとカール、グレースとともに新生ラザラ・カルテットを結成しようと持ちかける。

敗北感と激しい怒りを抱えその場を立ち去ろうとするエリオットに、ドリアンはグループ名にもあやかかった、名器・ラザラのヴァイオリンを返すように要求。これは自分のものだと言主張するエリオットと、カルテットで使用する楽器はカルテットに所属するものだと言主張するドリアン。口論は、やがてアランやカールを巻き込んでいき……。

翻訳家からのメッセージ

平川大作

2009年、小川絵梨子さんが訳して演出なさった『Zoo Story』と、私が翻訳を担当した『TEA』という芝居とが二本立てだった折に下北沢の打ち上げの席で初めてご挨拶を交わし、その2年後に同時に翻訳戯曲賞を受賞したのが次のご縁。今回同じ作品に携わることができるのは、私にとってまさに念願かなった三度目の正直のご縁となります。とはいえ、翻訳と演出を自在にこなす小川さんに、他の翻訳担当が一体何をもって加勢できるのかと考えはじめると、ただ喜んでばかりもられません。さて、どうしたら？ そういえば、経験豊かな弦楽四重奏団を描く今回の作品『OPUS / 作品』で登場人物たちは、単独で脚光を浴びる独奏ではなく、合奏でしか得られない妙なる響きの至福を求めています。その芸術の自由さとのびやかさを愛しています。きっと芝居作りも同じはず。自分もまた今回の上演を豊かにする弦の一筋となることができればと考えています。

演出家からのメッセージ

小川絵梨子

『OPUS / 作品』は、或るカルテット(四重奏楽団)についての物語。一時は脚光を浴びたものの、今は下り坂のカルテット。音楽家としての自負と不安、プライドと嫉妬、理想と現実。その狭間で揺れながら、芸術家として生き残っていくために、彼らは何を選択していくべきなのか。

これは、音楽を愛する男女が、自身の誇りと生き残りを賭けて葛藤する様を描いたシニカルなコメディです。

カルテットのメンバー達は互いに信頼と尊敬で結ばれています。しかし一方、プロフェッショナルとして情に流されない厳しさも必要とされる。個人では拮抗しながらも、カルテットとしては調和を保たなければならない。メンバー同士が繰り広げるパワーゲームは、どこか哀しく、どこか可笑しい。

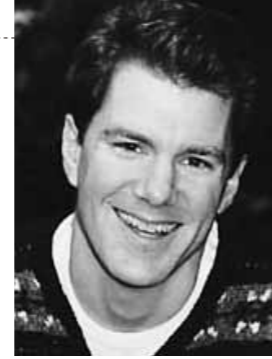
人間関係の危ういバランスを緻密に軽妙に描きつつ、シビアさのあるコメディにしたいと考えています。一人で奏でる音よりも、四人で奏でる音楽を愛しながらも、不和と衝突は避けられない。個人と全体の調和の狭間で揺れる葛藤を、丁寧に鮮明に描きたいと思います。

OPUS / 作品

マイケル・ホリンガー

Michael Hollinger

1962年、米国ペンシルバニア州ランカスター生まれ。劇作家。ヴァイノヴァ大学芸術科学部准教授。84年、ヴァイオラ奏者としてオーバーリン音楽学校で学士号を、89年ヴァイノヴァ大学芸術科学部演劇専攻で修士号を取得。『OPUS / 作品』以外の主な作品に『カフェ・ド・グラン・ブフの空のプレート』（94年）、『インコラブティブル』（96年）、『タイニーアイランド』（97年）、『レッド・ヘリング』（2000年）、『トゥース・アンド・クロウ』（04年）、『ゴースト・ライター』（10年）など。アメリカ劇評家協会賞、バリモア賞など数々の演劇賞も受賞している。



平川大作

Hirakawa Daisaku

1969年、愛知県犬山市生まれ。九州大学文学部、大阪大学大学院演劇学専攻で学び、「ひょうご舞台芸術」に調査研究員として参加。2000年より大手前大学に勤務。メディア・芸術学部准教授。主な翻訳担当に01年『コペンハーゲン』（新国立劇場）、03年『扉を開けて、ミスター・グリーン』（ひょうご舞台芸術）、12年『アテンプツ・オン・ハー・ライフ』（エイチ・エム・ピー・シアター・カンパニー）など。11年に『モジヨ ミキボー』（オーウェン・マカファーティ作、鶴山仁演出）で第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。兵庫県伊丹市在住。



小川絵梨子

Ogawa Eriko

東京都出身。聖心女子大学卒業後、ニューヨークへ渡り、アクターズスタジオ大学院にて演出を専攻する。卒業後、リンカーンセンター・ディレクターズラボに参加。平成17年度文化庁新進芸術家海外派遣制度2年制派遣員。現在、ニューヨークと東京を拠点に活動する。近年の演出作品『今は亡きヘンリーモス』の翻訳において第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞。『12人 ～奇跡の物語』『夜の来訪者』『プライド』で第19回読売演劇大賞・杉村春子賞、同賞・優秀演出家賞を受賞。

